著者インタビュー

「言語の構造　人間の言葉と動物のコトバ」

川原 功司

宮本　今回は『言語の構造　人間の言葉と動物のコトバ』というタイトルで、名古屋外国語大学出版会から二〇二〇年の二月に刊行された本をお書きになった川原先生にお話をお伺いしたいと思います。川原先生、よろしくお願いします。

川原　お願いします、どうも。

宮本　それではまず、一つめの質問なんですけれども、今回この本をお書きになろうと思ったきっかけを教えていただけますか。

川原　最初は、『言語の構造』という授業を持っているので、そのために安く手に入る教科書を書こうというコンセプトで、編集長に促されて書き始めていたのがきっかけですね。その授業は数年前から担当していたので、授業ノート、データといったものはハンドアウトとスライドを作成していたので、それに説明文を追加していきました。

宮本　ありがとうございます。それでは、この本書はどのような読者を想定して書かれたものでしょうか。

川原　これには大人の事情が絡むのですけれど。名古屋外国語大学出版として、科研費の学術図書を取った実績が欲しいと言われましたので、当初の予定よりかなり大幅に加筆修正を行いました。現在の言語学に関連する研究状況ですが、たとえば生成文法を研究していますと言う人たちも、チョムスキーが生物言語学をやっていると言うので追従したりしているのですけれど、実際に生物学という視点から言語を研究するという興味や関心がある人たちって、とても少ないように感じられるんですね。一方で、新学術領域研究の『共創的コミュニケーションのための言語進化学』という研究組織に入っているのですが、言語に興味がある研究者ってたくさんいるんですね。文化人類学、コンピュータサイエンス、心理学、生物学、医学などを専門にしている人たちで。ただ、残念ながら、言語学の成果がほとんど届いていないんですよ。特に、チョムスキーという人の名前は知っているのだけれど、彼が実際には何をやっているのかが知られていない。ですから、科研費の申請に当たって、この両陣営をつなぎ合わせるということには意義があると思ったんです。言語学を専門にしている人たちにとっては、生物学的な課題というものを追究したらこういう問題があるということを伝えられるし、言語学のことは知らないけれど言語は研究してみたいという人たちには、言語学という分野がどういう問題意識で言語に取り組んでいるのかということを伝えることができる本には、学術的な意義があると思ったんですね。ベストセラーになるようなものではないですが、そういう本があればいいなと思って書きました。あとは、授業で本の内容を扱うにしても、学部生にこの水準の話をいきなり聞かせることはできませんが、授業をきっかけにもっと知りたいと思ってくれた学生に紹介できる本なのかなとは思っています。ですから、お答えとしては、八割は研究者向け、二割は学生向けといったところでしょうか。

宮本　なるほど。二割は学生向けということですが、大学の何年生ぐら

いを対象としていらっしゃいますか。

川原　学年は、二年生以降ですね。受講対象が二年生以上なので。しかし、学部二年生には難しい話題かもしれませんね。その気になれば大学院を対象にというところでしょうか。宮本先生も、自分の学生生活とNUFSの学生を見ていろいろ感じるところがあると思うのですけれど、少なくない割合の学生が妥協しないで学術的な内容を知りたいと考えているように思えるんですね。私はこんな感じで、緩くてチャラい雰囲気があるみたいなので、本気の学生にはきちんと届く言葉を伝えられるようにはしておきたいんですね。深い質問には深い回答、浅い質問には浅い回答を。学問というものに対しては、妥協したくないので。

宮本　そうですね。私も教えていて、意欲のある学生が多いなと感じています。与えられたものだけで満足せずに、もっとやりたいという学生が結構多いんじゃないかなと。

川原　この三月に卒業したゼミ生でも、二〇二一年度から大学院進学という人がいますね。本学、東京外国語大学での留学、スコットランドの留学でも優秀な成績でした。今後はLGBTを対象とするジェンダー研究をやっていきたいそうです。また、三年前に教えていた学生が、クイーンズランド大学に留学してきて、二〇二〇年度から名古屋大学の大学院でお世話になっています。指導教員も紹介しました。二〇二一年に出る、関西言語学会の査読付きのプロシーディングスも通ったようです。

宮本　すごいですね！

川原　大半は普通に就職していく学生ですが、在学中くらいは勉強したいと思っている学生や、進学などを考えている学生の存在についても意識しておきたいですね。それで、宮本先生なんかは特にロールモデルになると思いますので、少しだけ真面目な話をしていいですか。

宮本　はい、お願いします。

川原　特に女学生で多いような印象なのですが、すごく優秀なんですけれど、「どうせ女だから」と思って、自分も周囲も過小評価しているような学生が結構いる気がするんですよね。傍から見ていたら、ポテンシャルをものすごく感じる学生がいるので。自分で最初から天井を決めてしまうんじゃなくて、大学院進学ももちろん、他にもやりたいことがあるんだったら、機会のあるうちに飛び込むということをやってしまっていいんじゃないかな、と。それで、宮本先生みたいに若くて活躍されている人が身近にいると大きい存在になるんじゃないかなと思っています。「あ、この人ええやん」という感じで。というわけで、もし先生の分野や北米の特に中部で活躍したいという学生がいて、もし先生と話をしてみたいということがあれば、「あの人は優しいからアポをとって行っておいで」って言っちゃってもいいですかね。

宮本　ああ、そういうのは大歓迎です。いつでも。

川原　ありがとうございます。毎年、英米語学科だけで三百五十人以上の学生がいるので。これに関しては本当に、ガラスの天井を突き破って欲しいなと思っています。

宮本　そうですね。それでは次の質問なんですけれども、本書の「一番の見どころ」を教えて下さい。

川原　何と言っても、生物学という観点から言語学を紹介しているという点ですね。あと、この分野って本当に研究の進展が早いので、書いている最中に有力な仮説が変わってしまうんですよ。それで、校正の段階でも内容を変えないといけないという研究成果が出たりもする。ですから、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスが交配していたなんて常識もいいところで、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの分化が始まって以降に起こったFOXP2の配列の突然変異ですとか、デニソワ人とホモ・サピエンスの交配の証拠が見つかったとか。あとは、ネアンデルタール人由来のDNAはアフリカ人にはないと考えられていたんですけど、少ないだけで実はあったとか。そのシナリオとしては、一度アフリカから出て行って、ネアンデルタール人と交配して、その後、一部がアフリカに戻ってきていると。里帰りしている人間がいてもおかしい話ではないですよね。そういう話が、本の校正段階でも出てくるので、たとえば「アフリカ人にはネアンデルタール人由来のDNAはない」なんて文章は書き換えないといけなくなった。そういう作業が大変で。今でも既に古くなってしまった話がいくつかあるんですけれど、それは仕方のない話で。まぁ、どんどん研究成果が出ているということなので、おもしろい分野ですよね。本書の見所は、そういった最新の研究成果をまとめてあるので、そこが魅力なんだと思います。

宮本　実は、私も今日お話ししようと思っていたんですけど、その辺りの部分がとてもおもしろくて。結構英語概説の本とかって、「人間には言葉を話す能力がある。だから動物とは違うんだ。」のような感じでさらっ

と終わって、次にどんどん行ってしまったりするケースが多いと思うんですけど、この部分がしっかり書いてあるというところに魅力を感じました。

川原　そうですね。ですから、自分で疑問に思っていたことや基礎的な問いを真面目に考えているんですね。一口に「生得的な能力」とはいっても、生物学は基本グレイディエンスな境界ばかりの話になりますので。たとえば、字句通りに生まれた瞬間にできる生得的な能力というのはあります。本書で扱ったのが、蹄を持っている哺乳類は生まれた瞬間に立つことができるという話です。ですから、馬や牛は生まれてすぐに立つことができますが、人間には無理。で、人間の赤ちゃんは何もできないとか言われますけど、哺乳類なので、母乳を探し当てて飲む能力はあるわけで。それでは、生まれた瞬間に立つことができないのなら、人間には二足歩行をする先天的な能力がないのかと言われるとそれは違う。鳥が飛ぶということと同じですね。つまり、生得的な能力とはいっても、本当に生まれた瞬間にできるもの、練習の結果できるようになるもの、どう頑張っても無理なこと、個体差がある能力と段階があるんですよね。言語はちょうど練習すればできるようになる能力ですね。というわけで、こういう基本的なのだけれど誤解されやすい話をしています。あとは、誤解と言いますか、言語学に関連する「神話」「都市伝説」に関しても払拭できればいいなということで、「普遍文法」というターミノロジーに関しても語源を含めて説明してあります。これは本当によく誤解・曲解されている言葉で、最近出版された国際英語論に関する書籍でも、「普遍文法とは、人間の言語に共通して、普遍的な言語規則とされています」なんていうことを、チョムスキーの Aspects of the Theory of Syntax を引用して書いてあったりするんですが、そんなことは少なくともチョムスキーは言っていないんですね。一部、英語教育界隈などでそういう誤解があるというのは知っていますが、おそらくその辺りの噂話を聞いて孫引きですらない伝聞情報で書いたのだと思いますが、学生には論文で引用する際には一次資料を確認するように指導していないのか疑問に思います。原典に当たらない人たちが増殖したせいで、本人が言っていないことが流布することはアカデミズムの世界でも意外に多くて、生成文法ではそういうことが多いですね。一般論として、左脳人間・右脳人間や、日本人はハイコンテクスト文化の人で、〇〇人はローコンテクストという類いの神話もそうですよね。エドワード・ホール本人が言ったことを離れて、神話だけが定着してしまっている。そういう誤解を払拭するという役割もあると思うんです。

宮本　その通りですね。私も拝読させていただいたんですが、一冊に詰まっている情報量が本当に膨大で。今お話を聞いていてもですけれど、これだけの情報を得たり常にアップデートしたりしている秘訣といいますか、ルーティンみたいなものがあれば、ぜひ教えていただけますか。

川原　これは本当にただの幸運で。新学術領域研究に入っているので、領域会議などのイベントで全領域（言語理論班、行動生物班、人類進化班、認知発達班、創発構成班）の話が聞けるんですよ。講演を聞いて、さらにその人たちと個人的に話ができるので。今年はコロナのせいでできていないんですけど。本当にいろんな分野の人たちの研究を聞いて、話ができて、それで話の概要がつかめているので論文を理解するのも容易になる。そういう恵まれた立場にあるということが大きいのかと思います。ですから、そういう自分が得た知識を外に出すというのも自分の役割の一つなのかと思っています。というわけで、秘訣は運です。新学術領域研究のおかげです。

宮本　なるほど、常に学会や研究会議などに参加して情報のインプットとアウトプットをされていらっしゃるということですね。そこで得た最新の情報を、学生でも分かるような内容に還元してくださっているんですね。この本もいろんな例が提示してあって、非常にわかりやすかったです。

川原　ありがとうございます。前半の生物関係のところはおもしろかったという反応をよくいただいています。あと後半は、嫌いな人は嫌いですもんね、生成文法は。

宮本　そうですか？

川原　うちの学生も、二割か三割はすごくハマる子がいて、半分ぐらいは拒否反応を示して。あとの人たちは、「まぁやるけど……」みたいな。そんな感じになるんです。

宮本　それはちょっと残念ですね。ぜひ、あの楽しさを分かってもらいたいです。（笑）それでは次の質問なんですけれども、川原先生にとっての「人間の言葉」とはいったい何かというのを教えていただけますか。この本の、一番の大きな疑問になっていたと思うんですけど。

川原　定義は本に書いてあるとおりですね。音声や身振り・手振りなどの手段（モダリティ）を使って、象徴的、類像的な言語記号を組み合わせることによって、さまざまな思考やコミュニケーションを可能にするシステムということになるかと思います。ですから、音声言語だけが言語ではなくて、手話も言語ですし、手話が言語になるということは、ジェスチャーや表情にも言語記号になる可能性がある。実際、そういった意味は形式意味論を利用して記述することも可能になります。現在の私の研究の一環ですけれど。ですから、こういうものも広義の言語記号の一種ですね。つまり、言語は音声だけである必然性はない。また、ソシュール以来の象徴的な言語記号という観点は、確かに大部分の語彙に当てはまる話なのですけれど、類像的な記号も確かに存在するんですよ。手話では類像的な語彙は顕著にたくさんあるわけですが、音声言語であってもオノマトペ、これは私はイデオフォンと呼んでいますけれど、オノマトペという形でも存在している。ですから、言語の語彙が象徴的であるということは、数は確かに多いのですけれど、必要条件ではないのですね。というわけで、言語というのは自律的な構造に支えられたシステムなんです。

宮本　なるほど、ありがとうございます。それでは最後の質問になりますが、最後に読者へ向けて、何か一言お願いします。

川原　手に取っていただけるのは嬉しいです。ちなみに、この表紙ですけれど、デザインの原案は私が作っているんですよ。こういう寒色とか、青とか、緑とか。ビアンキという会社の自転車って聞いたことがありますか。

宮本　自転車の会社ですか？　すみません、ないです。

川原　こんな感じの色なんですけど。（自転車を見せる。）

宮本　すごい。ティールカラーですかね？

川原　ティファニー・ブルーに近い色ですね。これ、ビアンキはチェレステと呼んでいるんです。世界最古の自転車メーカーで、十九世紀にミラノのビアニローネという通りでエドアルド・ビアンキが生産を開始したんです。自分でも持っているとおり、好きなんですよね。だから、ベースの色をこのCK16にしてください、と。それで、このマークなんですけど、「言語構造が無限に作れるというのにあやかって、無限大を横にしましょう」と言ったんですよ。私が描いたのはこんなきれいじゃなかったんですけど、大学出版の方でこんなきれいな形にして返してくれました。編集長のご尽力のおかげです（笑）。そういうわけで、この8の字は、無限です。

宮本　まさか、デザインまでされていたとは思い及びませんでした。

川原　なお、『英語の諸相』のカバーは、完全に自分一人で作りました。LaTeXで作りました。色も自由に配合できますので。ですから、この色も（本の表紙を指して）チェレステというか、ティファニー・カラーでしょ。

宮本　お洒落な色ですね。まさかそこまでご自身でなさっているとは、驚きです。もっとお話を伺いたいところですが、そろそろお時間になってまいりましたので、今回のインタビューは以上とさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

川原　お話できる機会が今まであまりありませんでしたが、（このインタビュー記事に載っていない話の内容も含めて）楽しく話をさせていただけました。インタビュアーのおかげです。ありがとうございました。

聞き役プロフィール

宮本真有　名古屋外国語大学　世界教養学部　国際日本学科　助教

一九八九年愛知県生まれ。南山大学英米学科卒業の後、米国パデュー大学にて応用言語学の博士課程を修了。専門は日本語教授法、コンピュータを使った言語学習（CALL）、言語テスティング等。

インタビューを終えて

この度は、川原先生に直接お話しを伺う、貴重な機会をいただきありがとうございました。ご著書を読ませていただいた時にも思いましたが、ご本人に会ってお話しを伺うと、改めてその知識の深さと情報量に圧倒されました。それでいて、お話しが面白い。難しい内容でもユーモアを交えながら説明してくださるので、すんなり頭に入ってきます。既に、次の本の執筆作業にも入っていらっしゃるとのこと。益々、今後のご活躍から目が離せません！